

## 8月第2週の礼拝 説教

■日 時：2022年8月14日（日）

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「喜び、祈り、感謝。」

■聖 書：テサロニケの信徒への手紙一 第5章16-22節（新約p379）

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」。この御言葉は、テサロニケの信徒への手紙一の中で最もよく知られています。あるいは新約聖書の中でも、多くの人々から愛され親しまれている御言葉の一つと言えるでしょう。教会学校での暗唱聖句としてもよく選ばれていますし、キリスト教主義学校などでもよくとりあげられている御言葉です。この言葉の彫られた木製の壁掛けなどを部屋に飾っておられる方もいらっしゃるでしょう。そういうわけで、これは聖書の中の「良い言葉」の代表的なものであるとも言えます。けれども、この御言葉を日常生活の中で一つでも確実に実行しているか、と問われたら、ほとんどの方は「いいえ、できません」と答えるのではないのでしょうか。

「いつも喜んでいなさい」、私たちの中の誰がいつも喜んでいことができるでしょうか。「絶えず祈りなさい」、絶えず祈ることが何よりも大切だということは信仰者なら誰でも知っていることでしょう。しかし時には、祈りの言葉さえ何一つ口にできない状況が私たちを襲うことがあります。「どんなことにも感謝しなさい」私たちの身近なところで起こる様々な困難や苦しみや悲しみに出会う度に、感謝などとてもできないと、自分自身の力のなさを思い知らされる御言葉ともいえます。そのような意味では、私たちがどんなにつらいことや苦しいことや理不尽だと思っても、喜んで、祈りつつ、神様に感謝して生きることを勧めているこの箇所は、聖書の中で最も厳しい御言葉と言えるかもしれません。

では、何故著者のパウロはこのようなことを勧めるのでしょうか。18節後半で「これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」と語られていることに気づきたいと思います。それが理由なのです。「神があなたがたに望んでおられる」という言葉を、元の言葉通りに訳すと、「それが神の意志である」となります。私たちが喜び、祈り、感謝して生きることを、神が望んでおられる、それが神の意志である、だから、いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝するのです。私たちの中に、喜ばしいことがあるから飛び上がるようにして喜び、祈りたいことがあるから熱心に祈

り、感謝すべきことがあるから、涙を流さんばかりに感謝するものではありません。神が私たちにそれを望んでおられるから、それが神の意志であるから、それに従って、私たちは喜び、祈り、感謝するのです。言い換えるならば、この喜び、祈り、感謝の根拠は私たちの中にはないのです。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」という御言葉を聞いて、自分の中にどんな喜びがあるか、祈り心があるか、感謝すべきことがあるか、と追い求めて捜していくなら、この言葉は私たちにとって重荷となり、まことに厳しい、残酷な言葉になってしまうのです。そうではなくて、神様が私たちに対してどのようなみ心を抱いておられるのかを探り求めていくための道標として、いつも覚えておきたいと思います。

そして、神様が私たちに望んでおられること、すなわち神様の意志は、「キリスト・イエスにおいて」のものなのです。テサロニケの信徒への第一の手紙を続けて読んできて、「主イエスに結ばれた者」、「主に結ばれた者」という言葉が非常に重要であると何度もお話してきました。本日の箇所でも、「キリスト・イエスにおいて」と訳されている言葉が「主イエスに結ばれた者」と同じ表現なのです。キリスト・イエスにおいて神様が私たちに望んでおられること、それは言うまでもなく、私たちが主イエスによる罪の赦しの恵みを受け、神様の民として、神様が大切に愛し、育み、養って下さる神の子らの群れに加えられることです。私たちがその救いにあずかることをこそ、神様は望んでおられるのです。神様はそのために独り子イエス・キリストをこの世に遣わして下さいました。そして主イエスが、私たちの全ての罪を背負って十字架にかかって死んで下さったのです。独り子主イエスの死によって私たちの罪を赦して下さいること、それが神様の意志です。私たちの信仰とは、この神様の意志が自分に向けられていると信じることです。そしてこの意志に従うことです。神様が、独り子の命を犠牲にしてまで、この私を愛しておられる、その愛の意志を信じて、それに従い、神様に愛されている自分であることを受け入れるのです。この神様の愛の意志は、私たちがどのような者であるかによって左右されることはありません。私たちがどんなに深い罪を犯している者であっても、清く正しい生活ができずに汚れた思いと行いに陥ってしまっても、そのような罪人のためにこそ独り子主イエスを遣わし、十字架の死による救いを与えて下さった神様のご意志は決して変わることはないのです。また私たちがどのような苦しみや悲しみに陥っていても、自分を取り巻く状況が絶望的で、何の希望も持てないと思うことがあっても、それでも、独り子の十字架の苦しみと死によって私たちを愛して下さる神様の意志は決して揺らぐことはないのです。

その様な主イエス・キリストにおける様の意志のゆえに、私たちは、いつも喜んでいることができるのです。絶えず祈ることができるのです。どんなことにも感謝することができるのです。ですから、私たちが自分自身の力で、「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝しなければならぬ」と歯を食いしばって頑張る必要はないのです。聖書の御言葉は、私たちががんじがらめに縛る苦しみ的人生訓ではなく福音だからです。

私たちを取り巻く現実の中には、変えることのできるものと変えることのできないものがあります。テサロニケの信徒への手紙一 5 章 21、22 節では、それらを吟味して識別しなさい、と勧めています。そのためにこそ、「絶えず祈りなさい」との励ましがなされているのです。そして、私たちが絶えず祈ることができるようになるためには、祈りのお手本などに触れることも大切です。例えば、祈りの言葉さえ出てこないときには、主イエスが弟子たちに教えてくださった「主の祈り」を繰り返し繰り返し祈れば、私たちに必要なものは盛り込まれているので安心です。また、先週ご紹介したフランシスコの「平和を求め祈り」などを祈ることにより、私たちが人と人とのつながりの中でどのように歩んでいけばよいのかが示されます。そして、私自身が 50 年以上も信仰者として歩んで来るときに、いつも道標となった祈りがあります。聖書についても、キリスト教についても、教会についても、ほとんど何も知らないときに、私の母教会の牧師が説教の中で紹介されたものです。アメリカに留学して、ラインホルド・ニーバーという神学者について学ばれたその牧師は、その祈りをご自分で日本語に訳されて、日本で紹介されました。今でも、部分的に様々な方が引用している場面に出会います。本日は、その祈りをご紹介して、今週一週間の歩みのスタートといたしましょう。「ニーバーの祈り」として紹介されることが多いですが、私は「冷静さを求める祈り」として教えていただきました。

## THE SERENITY PRAYER

O God, give us  
serenity to accept what cannot be changed,  
courage to change what should be changed,  
and wisdom to distinguish the one from the other.

Reinhold Niebuhr

「神よ、  
変えることのできるものについて、

それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。  
変えることのできないものについては、  
それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。  
そして、  
変えることのできるものと、変えることのできないものとを、  
識別する知恵を与えたまえ。」

ラインホルド・ニーバー（大木英夫 訳）

（1967年に大木が『中央公論』に発表した論文の中で紹介され、後に、大木英夫著『終末論的考察』、中央公論社、1970年に収録された。）